

黒翼の天使

晴海まどか

黒翼の天使

「俺は天使だ！ お前の願いを一つ叶えてやる」

愛犬のペギーが死んだある冬の日。あたしの目の前に現れたのは、黒い翼を持った自称天使だった。紫色の、まるでゴムボールの丸い形。そのボールの表面には取って付けたようなまん丸の黒い目と、パックマンのような口。手のひらサイズで、手足はない。あるのはやたらと立派な黒い翼だけ。黒翼をパタパタとやるその様は、まるでギャグ漫画の中の悪魔そのもの。

「さあ言ってみろ！ お前の願いは何だ！」

その口をパカパカとやり、彼はあたしの目の前で顔に似合わずドスのきいた声を上げた。でもやっぱりゴムボールなので笑うしかない。

「何がおかしい！ 早く願いを言え！」

なかなか願いを言わないあたしに業を煮やした自称天使、しまいにはあたしの部屋中の物をヒョイヒョイと飛ばし始めた。目の前を横切るティベア、鉛筆、参考書達。一応その力は本物らしい。すっかり感心しているあたしを見て意地になったのだろうか。その日以来、彼はあたしの部屋に住み着いて、しきりに「願いを言ええー」を繰り返している。

そんなある日。

「ああああー！」

すっかりあたしの部屋の一部と化していた自称天使、突然悲鳴にも近い絶叫を上げた。すっかり彼の定位置と化した本棚の三段目に目をやると、あら不思議。紫ボールはピンクボールに大变身。おまけに自慢の黒翼はなんとも綺麗な白翼に早変わり。

「畜生畜生！ お前の願って何だよ一体！ せっかくお前を陥れて大悪魔になろうと思ってたのに！ 悪魔はなあ、人間の願いを叶えちゃうと天使に変わっちゃうんだよお！ お前、何願ってたんだよおお！」

「……可愛いペットが欲しい」